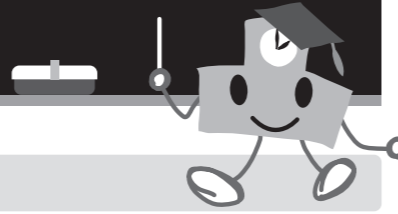


小学校の事例 南区 南の沢小学校

メダカやサンショウウオが観察できる、2つのビオトープ。

2つのビオトープをもつ利点を生かした取組。
子どもが管理を手伝うことで自然をより大切にしていける心が育ち、生き物がすむ環境を守っていく意識につながっていく。



内容 ザリガニやミジンコを 教科の中で観察

本校には、水田として使われていた場所を活用し、平成14年に作られた「水田ビオトープ」がある。もとは理科の稲作の学習で使用されていたものだが「使われなくなった水田を埋めてしまうのはもったいない」ということで、ビオトープとして活用していくことになった。さらにもうひとつ平成17年に開校30周年を記念し、「地域支援型モデル」として設置された「記念ビオトープ」もあり2つのビオトープのある学校となっている。

「水田ビオトープ」は、地域に自生しているトンボが夏に産卵する場所になっている。秋には越冬準備のため池の中の生物を学校内の水槽に移す作業を行うが、水槽へ移しそびれたサンショウウオが越冬し、産卵しているようすをうまく観察できたこともあり、自然界を生き抜く生物のたくましさを実感できる場所にもなっている。

5年生の理科では、「水田ビオトープ」の水を採集する



水田ビオトープ

ことが容易であることから、そこにすんでいるミジンコなどの微生物を観察している。ミジンコやそれを餌にする生物の生態を確認することを通して、子供たちも生き物のつながりに気付き、生物多様性について考える機会となった。

「記念ビオトープ」では、春に近くの水場から採取したオタマジャクシや校内の水槽で秋から越冬していたメダカ（中には水槽で育った子メダカもいる）を放流している。例えば、2年生の生活科ではザリガニを教材とした単元があり、その時には実際にビオトープに生息しているザリガニを捕まえてきてお世話をしている。生き物と実際に触れ合う体験をとおして、自然を大切にする気持ちが育っている。

このように2つのビオトープは、本校の子供たちにとって、周りの山や林の延長線上にある「学校の中の『自然』」という存在であり、日常の学校生活の一部となっている。



記念ビオトープ

効果 ビオトープを大切に作る心から 環境を想う心へ

ビオトープは落ち葉が詰まったり異物が入り込んだりすると、循環ポンプが正常に動かなくなり、水が濁ってしまう。これを防ぐため、学校の教職員が行う整備のほかに、飼育委員会の児童が池の落ち葉を取り除く活動をしている。

落ち葉清掃が重要な作業であることを子どもは理解しており、多くの子が休み時間を利用して自主的に様子確かめている。このように、自分たちのビオトープ、生き物がすむ環境を守りたいという気持ちが、環境にやさしい生活を送ろうという日々の行動につながっている。



ビオトープの全景

今後 より多様な生き物がすむ環境へと育てる

ビオトープは、どの程度人の手を加えてよいか判断しにくいことがある。本校としては、水を循環させるためにポンプを使うのではなく、池の内側を土やわらで覆い、もっと小さい生物がたくさんすめるような「隠れ家」を作りたいと考えている。そして、児童がさらに興味をもって観察できる場所に育てていきたい。

これからは札幌市内にある他の学校ビオトープを見学するなどして、参考にできる部分を取り入れながら、本校らしいビオトープを作り上げ、より一層児童の環境を想う心を育てていきたいと考えている。



ビオトープの秋の木々

広げよう
つなげよう
環境学習の輪

実施校からメッセージ

本校には水飲み場の空いているスペースを利用した「生き物広場」があります。ここには「年中鳴くコオロギ」や、「ホワイトザリガニ」という体が半透明なザリガニが飼育されています。脱皮するようすを見ることができ、子どもがいつでも観察することができるようになっています。

実施校からメッセージ

本校には水飲み場の空いているスペースを利用した「生き物広場」があります。ここには「年中鳴くコオロギ」や、「ホワイトザリガニ」という体が半透明なザリガニが飼育されています。脱皮するようすを見ることができ、子どもがいつでも観察することができるようになっています。